

コロナ禍の学校の対応からみえる、 教師に求められる役割や資質能力について

About the roles and qualifications required of teachers as seen from school's measures against COVID-19

KEY WORDS

コロナ禍 ICT活用指導力 GIGAスクール構想

肝付俊朗

KIMOTSUKI Toshiaki

【要旨】

現在、コロナ禍にあって、まだまだ、学校では様々な変更や対応を余儀なくされることが多い。一方、生徒への教育の歩みを止めるわけにはいかない。世の中がどう変わろうとも、教師は今なすべきことを、できることは何かを考え、工夫と柔軟な対応を図りながら、生徒のために力を尽くしていくことが大切である。その一つに効果的なICTの活用がある。特に、国のGIGAスクール構想の実践も踏まえながら、今後さらに、教師のICT活用指導力を高めていくことが大切である。

1 これからの時代の学校教育

現在、グローバル化の一層の進展、人工知能（AI）の飛躍的な進化をはじめとする技術革新等により、社会構造は大きく変化している。インターネットによって広い範囲で人とモノがつながり、様々な知識や情報が共有され、必要な情報が必要なときに提供されるような新たな社会が進み、近い将来の予測すら困難な時代となっている。また、急激な少子高齢化が進む中で、これからの子供たちは、一人一人が社会の担い手として、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが必要である。さらに、今般の新型コロナウイルス感染症の世界的な流行は、これまでの常識や人々の生活等を大きく変えざるを得ないような事態が身近にあることを知ることとなった。

この先にある時代を担う子供たちには、学校において、様々な変化に主体的に向き合うとともに我が国の伝統や文化を大切に、他者と協働しながら価値の創造に挑み、よりよい社会を形成していく力を身に付けることが求められている。

2 新型コロナウイルス感染症の流行にともなう学校教育への影響

2020年になって、瞬く間に世界的な広がりを見せた、新型コロナウイルスによって、学校教育も大きな影響を受けることになった。特に、政府の3月2日からの一斉休校の要請を受け、

日本中の学校が臨時休業措置をとることとなった。ほとんどの学校が卒業や進級の時期を迎えようとしている最中、突然の対応に学校関係者はもちろん、生徒及びその保護者も無念の気持ちと不安や心配の気持ちで春の訪れを待った。卒業式では、感染予防のため、生徒や教職員はマスクを着用し、式歌等の合唱は制限され、保護者や来賓の入場を禁止とする学校もあった。4月になっても、新型コロナウイルスの猛威は収まらず、4月7日からの緊急事態宣言を受け、学校は臨時休業措置を継続せざるを得なかった。

2020年度の教育課程は3月31日の時点で、すでに完成し教育委員会に受理されていたが、継続する臨時休業に対応するため、授業時数及び年間行事計画、教科の指導計画等の大幅な変更を図らなければならなかった。教職員は連日、会議や打ち合わせを繰り返しながら、学校の教育目標を踏まえ、現状において、できうることの最善をめざし、夏休みの短縮、土曜授業の実施、学校行事の精選や実施時期の変更等、新たな教育課程を模索した。

一方、臨時休業中の生徒の学力の保障も切実な課題であった。4月の始業式を集団の密を避けるため、各教室での放送やリモートによる動画配信等で実施し、翌日からは、再度、自宅待機を求められた生徒に対し、教職員は各学年、各教科で、教科書や副教材を参考に学習課題を作成し、配布した。生徒はよく家庭学習に取り組み、数週間ごとの課題提出日にはその取り組み成果を学校に持参した。5月になっても、臨時休業が継続する一方、学校再開に向け段階を踏みながら少人数での分散登校を進めることとなった。

さらに、学校では、家庭の情報機器やWi-Fi環境の調査をはじめ生徒個々にアカウントの配布を進め、オンラインによる朝学活を実施したり、インターネットやICTを活用した動画や映像資料を各家庭、個人に発信したりすることで、学習の機会を確保し、生徒の健康観察やコミュニケーションを図ることによって生徒の心の安定を図り、生徒、保護者との信頼関係の構築に努めた。しかし、教職員一人一人のICTの活用技術には限界や個人差があり、また、指導資料の有効性にもまだまだ課題があった。さらに、情報の受け手である各家庭には情報に関する環境に違いがあり、全ての家庭・生徒に一律に適切な情報を届けることに課題が見られた。(資料①・資料②)

※資料①②③は【新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた公立学校における学習指導等に関する状況について 令和2年6月23日時点】令和2年7月17日、文部科学省資料より作成
回答設置者数 小学校1,733 中学校1,763

【臨時休業期間中の学習指導等について】

資料① 学校が課した家庭における学習の内容（設置者数）

	小学校	中学校
教科書や紙の教材の活用	1,715	1,742
	100%	100%
テレビ放送の活用	608	586
	35%	34%
教育委員会等が作成した学習動画の活用	385	407
	22%	23%
上記以外のデジタル教材	591	627
	34%	36%
同時双方向型オンライン指導	138	173
	8%	10%
家庭でも安全にできる運動	1,076	1,047
	63%	60%
その他	30	22
	2%	1%

資料② 各設置者が臨時休業期間中の学習指導に関し課題であったと感じている事項（設置者数）

	小学校	中学校
学校と児童生徒・保護者との認識の共有	593	603
	35%	35%
登校日の設定等による学習指導や学習状況の把握	741	756
	43%	43%
指導計画等を踏まえた適切な教材等の提供	931	947
	54%	54%
各学校や家庭・児童生徒の実態を踏まえた積極的なICTの活用	1,434	1,462
	84%	84%
児童生徒による学習状況の違いに対応した学習の支援	1,252	1,261
	73%	72%
その他	6	6
	0%	0%

学校では、6月以降、さらに週に2回ずつの分散登校が始められ、生徒たちは、少しずつ学校生活を取り戻すようになり、6月半ばからは、ほぼ3か月半ぶりに、全校生徒による一斉登校が再開されるようになった。教職員は、未だかつてなかった長期にわたる臨時休業を経験し、遅れた教育課程の内容を取り戻すため、様々な手立てによって授業時数の確保を図るとともに、家庭学習の活用および教材や授業方法の工夫を進め、生徒に対する指導に意欲的にあたっている。このようにして、現在、学校は、コロナ禍にありながらも、生徒の学校生活の平常を取り戻そうと努めているが、こうした様々な対応をさらに進める上で、学校の教育活動におけるICTの有効な活用が、改めて課題となっている。（資料③）

【学校再開後の学習指導等について】

資料③ 学校再開後に行っている又は行う予定の工夫（設置者数）

	小学校	中学校
時間割編成の工夫	940	958
	55%	55%
長期休業期間の短縮	1,623	1,646
	95%	94%
土曜日の活用	263	288
	15%	17%
補習の実施	352	409
	21%	23%
次年度以降を見通した教育課程編成	200	210
	12%	12%
授業における学習活動の重点化	1,167	1,181
	68%	68%
学校行事の見直し	1,646	1,658
	96%	95%
ICTの活用	1,173	1,192
	68%	68%
その他	7	9
	0%	1%

3 教師のICT活用指導力の必要性

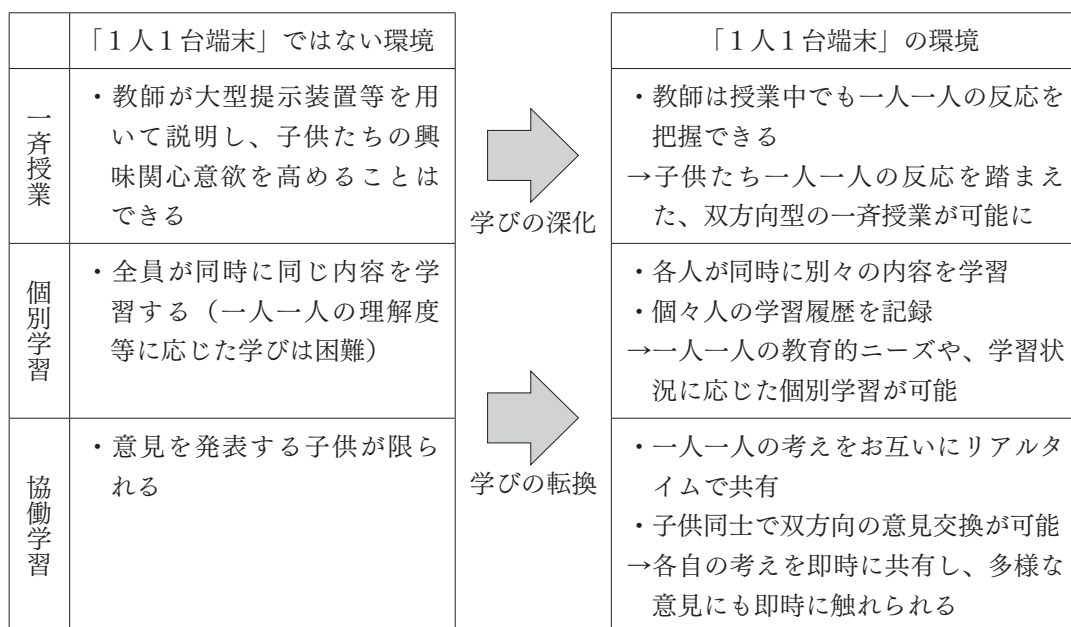
学校では、区市町村教育委員会の方針に基づいて、一定数の端末と各教室にプロジェクターが配備され、各教科や総合的な学習の時間等での調べ学習や発表活動に使用することがあった。社会のあらゆる分野で情報化が進んでいる情報社会にあって、生徒一人一人に情報を活用できる能力を身に付けさせることは重要であり、教師にはICTを効果的に授業に取り入れることにより、生徒の学習に対する意欲や興味・関心を高め、「わかる授業」を実現することは、これまでも重視されてきていたところである。新型コロナウイルス関係の臨時休業が解除され学校が再開されてからは、校内での三密（密閉・密集・密接）を避けるため、全校集会や学年集会をオンラインによって実施したり、生徒会役員選挙の立会演説会もオンラインで実施したりしている。さらに、各教室のプロジェクターと連動しながら、新たに、動画配信による資料提供や学習内容の可視化によるユニバーサルデザインの視点にもたったICTの活用がより重要になっている。学校では、こうしたコロナ禍での対応を通して、改めて、教師のICT活用指導力の向上を図ることの必要性を認識することとなった。このことは、これからの時代において、ICT活用指導力が、全ての教師に求められる基本的な資質能力であることを意味するものである。

4 GIGAスクール構想の推進

こうした社会情勢の中、現在、文部科学省では、「1人1台端末・高速通信環境」を実現するGIGAスクール構想を進めている。GIGAスクール構想とは、「1人1台端末と、高速大容量の通信ネットワークを一体的に整備することで、特別な支援を必要とする子供を含め、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育ICT環境を実現する」ことをめざすものであり、さらに、「これまでの我が国の教育実践と最先端のICTのベストミックスを図ることにより、教師・児童生徒の力を最大限に引き出そう」とするものである。背景には、「OECD生徒の学習到達度調査（PISA2018）」の結果において、科学的リテラシー、数学的リテラシーは引き続き世界トップレベルにあるものの、読解力は、高得点のグループに位置するが、前回より平均得点・順位が有意に低下していることから、コンピュータ画面上での長文読解の慣れなどの要因が複合的に影響した可能性があるという分析がある。これまでの教育実践の蓄積にICTを有効に活用することによって、学習活動の一層の充実を図り、新しい学習指導要領に基づく主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を目指すものである。（資料④）

資料④ 【1人1台の端末による学びの変容】

(文部科学省資料「GIGAスクール構想の実現へ」より作成)



学校では、現在、40台の端末が配備され、授業の中で生徒が使用している。生徒は目の前の端末で個別に動画や画像を視聴することはもとより、インターネットで調べ学習にも活用している。また、教師の作成した学習課題を端末上で解決し、教師がその状況を瞬時に把握したり、テーマに基づいて端末に文章を入力することで生徒同士が意見交換を行い、さらに、学級全体でその意見を確認し、教師が整理整頓したりしているなど活用の幅は広がりつつある。区市町村教育委員会の方針に基づき、年度内に1人1台の端末が配備される予定であり、その実現により、校内全体で、全ての教科、全ての時間に全員が端末を活用した学習が可能となるとともに、今後、家庭の通信環境を整備するなど保護者の理解・協力のもと、生徒が、授業の事前・事後学習として学習課題を家庭で準備したり、解決し提出したりするなど、手厚い指導が充実していくことが期待される。(資料⑤)

資料⑤【各教科での「1人1台」端末の有効活用】

(文部科学省資料「GIGAスクール構想の実現へ」より作成)

「1人1台」を活用して、教科の学びを深める。教科の学びの本質に迫る。	
国語 書く過程を記録し、よりよい文章作成に役立てる <ul style="list-style-type: none"> ・文書作成ソフトで文章を書き、コメント機能等を用いて助言しあう ・文章作成ソフトの校閲機能を用いて推敲し、データを共有する 	社会 国内外のデータを加工して可視化したり、地図情報に統合したりして、深く分析する <ul style="list-style-type: none"> ・各自で収集したデータや地図を重ね合わせ、情報を読み取る ・分析した情報を、プレゼンソフトで、わかりやすく加工して発表
算数・数学 関数や図形などの変化の様子を可視化して、繰り返し試行錯誤する <ul style="list-style-type: none"> ・画面上に表示した二次関数のグラフについて、式の値を変化させて動かしながら、二次関数の特徴を考察する ・正多角形の基本的な性質をもとに、プログラミングを通して正多角形の作図を行う 	理科 観察、実験を行い、動画等を使ってより深く分析・考察する <ul style="list-style-type: none"> ・観察、実験を動画等で記録することで、現象を科学的に分析し、考察を深める ・観察、実験のレポートやプレゼンテーション資料などを、写真やグラフを挿入するなどして、一人一人が主体的に作成する
外国語 海外とつながる「本物のコミュニケーション」により、発信力を高める <ul style="list-style-type: none"> ・一人一人が海外の子供とつながり、英語で交流・議論を行う ・ライティングの自動添削機能やスピーキングの音声認識機能を使い、アウトプットの質と量を大幅に高める 	

5 教師のICT活用指導力の向上に向けて

教師は、生徒に基礎的・基本的な知識・技能を習得させるとともに、それらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成し、主体的に学習に取り組む態度を養うため、生徒がICTを適切に活用できるようにすること、また、教師がICTを適切に活用して指導することができることが重要である。すなわち、教師は、教材研究・指導の準備・評価・校務などにICTを活用する能力、授業にICTを活用して指導する能力、生徒のICT活用を指導する能力、情報活用の基盤となる知識や態度について指導する能力を身に付け、かつ、ICTの特性を理解して指導の効果を高める方法や、生徒の携帯電話・スマートフォンやインターネットの使い方の実態等に基づいた適切な指導について、絶えず研鑽を積むことが必要である。特

に、「主体的・対話的で深い学び」の実現や情報活用能力の育成のためには、一人一人の教師が ICT 活用指導力の向上の必要性を理解し、校内外の研修等に積極的に参加したり、自ら研鑽を深めたりするとともに、教育委員会等が各学校の研修に積極的に関わって、教育委員会や教育センター等の研修を充実させることが必要である。

6 ICT活用指導力向上を図る校内研修の実施

学校では、新型コロナウイルス対策としての必要性からも、今年になって、限られた時間の中で、ICT活用指導力の向上を図るため、学校や教師の実態に応じた校内研修を工夫しながら実施している。特に、校長の指示のもと、ICT推進委員に任命された教師たちによる得意分野や先駆的な取り組みを生かしながら、全教職員が主体的に参加することが可能なワークショップ型の研修を実践したり、チーム・ティーチングを導入した模擬授業を取り入れた研修を行ったりしている。また、区市町村教育委員会から委託を受けた民間からの外部講師を招いて校内研修を実施している。

そうした取り組みから、教師同士の教え合いが進み、ICT機器を気軽に使えるようになってきている。また、教師にも生徒にも次第にICT機器の使い方に慣れが生じ、各教科、様々な学習活動でのアプローチが可能となり、生徒の発表やレポートでの記述などに少しずつ変化がみられている。今後、さらに、コンピュータの操作スキル習得のためだけの研修ではなく、教科の目標及び内容を達成するために生徒の興味や関心を高めたり、課題を明確に把握させたり、基礎的・基本的な内容を定着させるためのICT活用や生徒が情報社会で適正に行動するための基となる考え方と態度の育成するためのICT活用、さらに、個々の考えを全体で共有し分析することで深い学びにつなげるICT活用などといった、指導面でのねらいを明確にした研修を実施していくことが大切である。こうした研修を通して、教師の授業改善を図り、生徒の学習意欲や集中力の維持、理解度の向上等に成果を上げていかなければならない。

7 終わりに

これから先、ますます進展する情報社会の中で、一人一人の生徒に適切な情報活用能力を身に付けさせることは、ますます重要になっている。また、新学習指導要領を踏まえ、教師には生徒が ICT を活用して学ぶ場面を効果的に授業に取り入れることにより、生徒の学習に対する意欲や興味・関心を高めるとともに、問題解決力などを身に付ける探究的な学習活動を通して「主体的・対話的で深い学び」を実現することが求められている。

現在、コロナ禍にあって、まだまだ、学校では様々な変更や対応を余儀なくされることが多い。一方、生徒への教育の歩みを止めるわけにはいかない。世の中がどう変わろうとも、教師は今なすべきことを、できることは何かを考え、工夫と柔軟な対応を図りながら、生徒のために力を尽くしていくことが大切である。

(きもつき・としあき 町田市立鶴川第二中学校校長)

参 考

- 「教育の情報化に関する手引き」 (令和元年12月) 文部科学省
- 教育データの利活用に関する有識者会議(第1回)会議資料「GIGAスクール構想」について (令和2年7月7日) 文部科学省
- 新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた公立学校における学習指導等に関する状況について (令和2年7月17日) 文部科学省